

## 膨らむ世界、<sup>しほ</sup>む国

計量分析ユニット 永富 悠

### 「最終講義」

先日、恩師の最終講義を聞く機会を得た。先生の過去の足跡に触れ、改めて考えさせられる事も多く、大変貴重な時間であった。そんな先生の最終講義に触発されつつ、日頃思うことをコラムとしてキーワードと共に徒然に書いてみたい。

### 「ピークオイル論」、「人口論」、「成長の限界」

石油が枯渇する。いずれ訪れるであろうこの事象を、まさに来るべき事実と認識したことがエネルギーに興味を持つきっかけになったような気がする。使い古された言葉だが、産業革命以降人類が構築した社会は、まさしく地下資源の消費を前提として築きあげたものであり、枯渇という時限爆弾を根源的にはらんだ社会であることは明らかであったと思う。恐るべき速度で人類圏が拡大したことが、そのことを浮き彫りにしてしまったのではないか。この爆発的な成長の顛末を世に知らしめたものとして有名なのが、マルサスの「人口論」であろうし、ローマクラブの「成長の限界」であろうと思う。大学の輪講の題材として遅まきながら「成長の限界」を手にとった時、マルサスやローマクラブが語った「幾何級数的」という言葉に日常生活の四則演算とは違った爆発的な力を感じた。小難しい言い方してみたが、素朴に思う。「地球は人の重みに耐えられるのだろうか」。

### 「沈黙の春」、「緑の革命」

識者が見通した人類圏拡大の脅威に対して、地球は警鐘を鳴らしてきたのではないかと思う。それは「沈黙の春」に代表される公害問題であるだろうし、有り体に言えば今の地球温暖化問題もそのひとつであるだろう。その反面で「緑の革命」に代表される技術革新は、人類圏拡大の歴史であり象徴であるかもしれない。それらを包含して未来を描いた「成長の限界」は、まさに地球圏をシステムとして描写することにチャレンジしたものであったのではないか。改めて読み返せばシステムで考える事の重要性、面白さを認識させられるとともに人類の存在の重さと膨張していく事に対する恐怖を感じた。今日に至り、益々温暖化に対する議論が盛り上がる中で我々は己の重さに気づき、行動しなければならない。

### 「課題先進国」

そんな中で日本という国は、必ずしもこの拡大の流れに乗っていない稀有な存在なのではないかと思う。いみじくも小宮山前東大総長が言及される「課題先進国」という言葉を皮肉に思い出す。文明開化と言われる転換点からまっすぐに、いわゆる「高度成長」に邁進し、その結果として生み出された複雑な社会制度、少子高齢化社会、訪れる人口減少。

日本は非常に面白い国だと思う。論理の飛躍を承知で言えば、豊かになることに邁進した  
が故に自壊する社会を築いてしまったのではないか。成長・豊かさ・繁栄の追求の果てに  
待つ自壊、これほどアイロニーを感じる事もない。

#### 「持続可能な社会」、「貧困の罅」

しかし、これをまさに「課題先進国」ととらえればどうであろう。つまり、日本は多くの  
発展途上国がこれから直面するであろう課題を先取っているのだとしたら。極論すれば、  
豊かさが満たされれば、自壊への道、否、人口の爆発的増加を抑えられるのだとしたら。  
いわゆる「貧困の罅」を抜け出し、進んだ社会を歩む事が「持続可能な社会」につながる  
のであればどうであろうか。また、豊かな社会の訪れには貧困からの開放、紛争の根絶、  
知識・権利の獲得など、人口増加を抑えること以上に重要な価値があるのではないか。そ  
して、そこには真に持続可能な社会の構築に必要なものがあるのではないだろうか、など  
と夢想してしまう。

#### 「地球温暖化対策」

今、温暖化対策と言えば、お得意の技術革新、排出権、炭素税等と対症療法的に優れた  
方法を中心に議論されている。ターゲットが 2050 年であろうと 2100 年であろうと、議論  
の中心は変わらないであろう。このターゲットに向かって現在から見た時間は、世代が入  
れ替わるに十分な時間とはいえないだろうか。だとすれば、国連が IPCC が各国の人々が、  
人類と地球の未来を考えると、例え空虚なものに見えたとしても、議論すべき点として  
事の根源を問う議論がもっとあってもいいのではないだろうか。枝葉ともいべき対症療  
法的な考え方だけでは、大きな事がまさしくドラマティックに変わるとは思えない。

#### 「恒星の最後」

国連の予測の中には、2050 年においても人口は増えるという見通しもある。20XX 年、  
地球はどうなっているのだろうか、世紀末の救世主は現れるのであろうか。恒星は太陽程  
度の質量であれば、白色矮星という形でその一生を終えるが、太陽の 8 倍以上ともなれば  
超新星爆発という最後を辿る。惑星である地球の運命は果たして。

まとまりなく、思っている事を文字にしてみたが、先人達の議論はもとより、数多くの  
SF の影響を受けているような気がしたことは、我ながら興味深い。個々のキーワードは既  
に議論し尽くされたものばかりだと思う。しかし、それが現実に起こりつつあるのを目の  
当たりにする今、人口減少に直面するこの島国で理想論を思い浮かべ、現実との彼我の差  
を思い知る日々だ。人類の足跡を高らかに語れる未来が訪れることを期待したい。